

2018年5月15日掲載

「幸福度世界一の国の教育」

このゴールデンウィークはフィンランドへの教育視察ツアーに参加した。フィンランドは、2000年に始まった経済開発協力機構（OECD）の生徒学習到達度調査（PISA）で毎回上位に位置付けられており、その教育の背景をこの目で見たいと以前から思っていた。北海道と似た気候であり、人口も約550万人と北海道とほぼ同じである。

訪れたのは首都ヘルシンキ周辺の幼稚園や小学校、中学校、職業学校などである。一番驚いたのは授業風景だ。小学校では児童がトランポリンをしたり、寝そべったりしながら授業を受けていた。美術の時間はヘッドホンをしながら絵を描いていた。これは、好きな音楽を聴きながら、集中して授業に取り組むためのスタイルであるという。点数ではなく、子どもたちがどうしたら主体的に学べるかという考え方の下、先生は教えるだけでなく、ファシリテーター（進行役・促進者）やコーチのような立ち位置で子どもたちの能力を引き出している姿が印象的だった。

また建築学校では、ただモノを作ることにとどまらず、建築教育として住んでいる街のことを知る機会を増やし、市民参加や政治への興味につなげる役割も担っていた。

今年3月に国連が発表した「世界幸福度ランキング」で1位になったフィンランド。教育からその背景を一部垣間見た気がした。地域や国と共に幸せな未来をつくる教育。ぜひ北海道でも、よりよい街づくりを目指し、子どもたち主体の教育に取り組んでいきたい。

（毎日新聞より）